

Title	二つの国際学会のホスピタリティについて
Author(s)	仁平, 雅子
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 4, p. 24-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4747
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

二つの国際学会のホスピタリティについて

仁平雅子

私はドイツ・イギリスと二回の学会に参加しました。実りある学会運営のために、それぞれの開催事務局がしつらえた道具立てに着目してみようと思います。

* 遠方からの参加者のための宿泊の手配
...でき得る限り会場敷地内で、華美であるよりはシンプルで清潔に、できるだけ低料金で。まったく無記名な雰囲気より、過去にどんな人がここにきたらうと思いを馳せられるような、もろもろの小さな痕跡や木々の眺めがあるほうが好ましい。希望すれば3食付き。部屋の鍵は自分で管理できること。部屋から国際電話ができるとうとううれしい。

* 参加者の言葉のハンディを最小限に押さえる
...これは一見参加者一人一人の努力に負うところが大きいようにも思えるが、主催者側の姿勢は基本的なトーンとして重要。あらかじめハンドアウトを用意する。部屋のサイズ。通訳やマイクの手配。コピー機の準備。等々、案外ハード面の状況が左右する。

* ヨーロッパの夏の日照時間を無駄にしない
...なんで夜9時近くまで当然のようにプログラムでぴちぴちなのかは、好意的に考えればこういうことでしょう。みんな時間とお金を使って参加するんだから、損した感じはみじめな気分につながるのかな。適度なお得感はプログラム内容とも緊密に関連する。

* 集えるスペース

...しかしそうなってくると、バーとか、大きな木の下とか、眺めのいいテラスとか、

はっきりと雰囲気異なる空気のあるところが生理的に必要になってくる。

* ティータイムを忘れない

...さらに、お茶のできる時間と場所はタイムスケジュールの中に明記し、飲み物・お菓子はそれぞれ三種類ほどのチョイス(胚芽クッキーかチョコチップクッキーかバタークラッカーか、といったマイナーなチョイスでもOK)が可能にようにする。お茶に呼ばれなかったと思わせるようでは困ります。そして、サービスには特に厳選された人物を選ぶこと。

* 学会長はとにかく「姿を見せる」

...プログラムの内外に関わらず、ほとんどの人が集まるような機会には主要なメンバーは姿を見せる。特に学会長の存在は、学会の「表舞台」として参加者に共通の記憶を作る。

近い将来、日本で国際的な哲学の学会が開催されることがあるとして、私たちならどのような形で遠来の客を迎えることになるのでしょうか。テーマは『ホスピタリティ』かもしれませんね。

(にへいまさこ 博士前期課程)